

すべて世はこともなし

暇に任せて、明治十四年の新聞を読んで見る。

越後の国は古志郡、栃尾の郷なる吉水村に、代々医者をやとする加藤儀庵（三十九歳）といふ者あり、妻女のおじん（三十五歳）との中に男女の子三人をなせり。

儀庵は所有の田畑もあり、貸し金もあれば、医は表稼業にてさして流行らぬといへどもいと豊かに暮らせり。

吉水の隣り村なる原村の、塩谷入と唱える往来ばたに、侘しく住居する佐藤権松（三十一歳）は、いささか飴菓子などあきなふ者なるが、女房のおよし（二十五歳）は鄙には稀れなる器量にて、掃き溜めに鶴ともいうべく、されば権松は果報者よとて近在に羨まぬ者なし。

儀庵は病家への往来の途次、偶にはこの家へ腰掛け休むこともありしが、見る毎におよしの勝れし容色にいつとなく心迷い、ある日権松に向かひて、物は相談なりと。折り入って頼みたき事は別儀にあらず、貴公も知らるる如く愚老は代々医者にて、まずは困らぬ身代なり、それに引き替え、まことに失礼ながら貴公は株式も無く、

いわば水呑み百姓なり。しかれども、妻女およし殿の容儀は格別、
栃尾一郷には及ぶ者無し。

相談まさにこのことなり。

なんと愚老が身代、田畑家財並びに女房子供一切を貴公に進上するが故に、代つて貴公、このぼろ屋と妻君およし殿を拙者に譲り渡し、取り換えてはくださらぬか。

これには権松も余りのことに呆れた悪戯ならんと思ひしが、儀庵は真面目にいと思ひ込みたる風情なり。

よつて其の後一二度の応接にて、先月二十五日に熟談整い、されば後来紛糾の起らぬ為にと、女房その他一式交換の証文をば中道学校の生徒に認めて貰ひ、金沢村渡辺某を証人として印紙も貼用、互いに親類等へは無沙汰のまま、本月二日を双方の黄道吉日と定め、身代限りの例に習ひ、儀庵は稼業道具の菓籠一個を携え、塩谷入の権松が檻樓家屋へ移りにけり。

されば、権松はこれまでの首も廻らぬ借金と、むさき檻樓を錦衣に更へて、吉水村の加藤の家に乗り込み、元よりかくありしか如くおじんを妻とし、子を子となしたるは風教地を払ひ、倫理を乱す拙拙たる怪事といふべし。

戸長組合親類縁者など、この儀を遅れて聞きつけ、世にも途方も無き事と説諭に及べど、儀庵は頗るつきの別嬪を得たるによりて他に余念なく、筵屏風の陰に卓袱を敷きて座り、格別の新しき女房を顧みて悦に入り、本人どもが承知のことをなんの余人が要らぬ世話なりと、ついに聞き入る景色なし。

奇観なるかな、噫。

(明治十四年四月十三日 東京日日新聞)

遠眼鏡で逆に覗いて見たように、時空を遙かに超えた彼方では儀庵先生や権松が楽しそうにやっている。のどかであるが、およしさんはどう思っているのかしら。

自分は医者だといえはそれで通つたらしい時代は明治八年で終わって、翌九年にはおつかない内務省が医術開業試験施行を各府県に通達した。この頃漢方医は全国で一四八〇七人、西洋医五〇九七人、漢洋折衷(！)二五二四人であつたという。

薬籠ひとつ携えて欣然として陋屋に移った儀庵先生も多分漢方医であつたらうが、五年前のふるい分け試験をパスしていたのだろうか。

(神庫 二〇一〇年 三月)